

[040] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339048>

出版情報 : 史淵. 40, 1949-03-20. Faculty of Law and Letters of the Kyushu University
バージョン :
権利関係 :

彙報

昭和二十三年度

九州史學會例會

本年度例會は六月十三日法文學部第七演習室にて行はれた。當日たまたま西鐵労働ストとて參會者必しも多數とは言へなかつたが、左記の如く午前九時より研究發表あり、午後講演會があつた。

研究發表

一、福岡藩に於ける産子養育米の制度について

加藤 義雄

一、ジャクソン・デモクラシーの成立

櫻井 東樹

一、近世商人の發達と農村の關係

安藤 精一

一、封建制度の起源について

松垣 裕

一、下城貝塚發掘について

賀川 光夫

一、織田信長の體質學的研究

王丸 勇

一、唐の均田法の施行狀況に就いての考察

日野 敦

講演

近藤 典二

一、カルヴェインの思想について

西南學院教授 益田 健次

一、日宋關係の成立

森 教授

〔講演要旨〕

カルヴェインの思想

益田 健次

ルッターやカルヴェインによつて起されたリフォルメーション(特にカルヴェインのカルヴェイニスム)は、近代に對してどんな意味を持つてゐるだらうか。

リフォルメーションと近代政治思想、特にカルヴェイニスムと近代政治思想との關係に於て、近代デモクラシーの精神的母胎はカルヴェインの宗教改革であると主張する人々がある。特にこの主張は英、佛に於て強く現われてゐる。ドゥ

メルゲ、フォスター、ワイス其他。これに對して、この主張を修正する立場の人達もある。それによると、近代デモクラシーとカルヴェインの宗教改革は關係が無いが、歴史的に發展していつたカルヴェイニスムと近代デモクラシーは關連があるという。ボルジョアの如きはその一人である。然るに前二者の主張と相違して、兩者間の精神的關連を否定する一派の人もある。シュムヴェイェルの如き。

カルヴェインその人の民主思想に就いては、カルヴェインの時代から現在まで激しい論議の對象となつてゐる。カルヴ

イン自身非難と賞讃の的であつたし、一部からは自由の抑
壓者として見られてゐる。カルヴィンと民主思想とを結び
つけて論ずる者は、その國家觀の三つの特質、即ち立憲政
體、選舉制、民主的を擧げる。之に對する異論は、彼は近
代的でない、彼は人民主權を許さなかつたからと。そして
デモクラシーと近代デモクラシーとは區別される可きであ
ると説く。(尙この所に於てドゥメルグは、今日多數の者
が了解するような意味の人民主權なるものは、中世人には
全然知られてゐなかつたのであるから、この點でカルヴィ
ンを責めることは出来ないとの意味のことを述べてゐる。)
カルヴィンの教へは、その發展のあとづけをする時、民
權に影響を及ぼした。近代民主思想の父祖と言はれるテオ
ドル・ベエズその他のカルヴィニスト達の中に近代思想が
つくられていつた。この見方は、リフォルメーションの眞
の意義を、その意圖に於てよりその結果に於て見ようとす
る、グーテの言、近代デモクラシーはリフォルメーション
の子であつてリフォーマーの子でないという意味と相應す
る。

日宋麗關係の成立

森 克 己

歴史の發展には社會的契機の外かに自然的契機が働いて
ゐる。遣唐使廢止後、大陸商船の來航によつて行はれてゐ

た受動的貿易は莊園の發達に伴ひ、莊園内に於ける密貿易
を發生せしめ、これが權大強化されて能動的貿易の氣運を
醸成した。そして莊園領主や大宰府商人によつて海外進出
が企てられるに至つたのである。ところで日本商船は造
船・航海技術の拙劣といふことの外か、海洋の特殊性から
の制約をも免れなかつた。従つてその終極の目的は大陸に
ありながら、この技術的・自然的制約の下に先づ高麗方面
に向かはざるを得なかつた。丁度この十一世紀の頃は、高
麗は前後を通じ、日本商船を受容れるには最も好適な時代
であり、日本・宋も貿易發展の好適條件が整つてゐた。そ
の結果日・宋兩國商船は高麗を仲介地として、文化・物貨
の交流を行つたのである。しかるにこの日宋麗關係は十二
世紀に入り、國際情勢の變化、日本商船の技術の進歩等に
よつて遂に崩壊し去り、日本商船の宋への直接渡航・貿易
へと展開したのである。

〔研究發表〕

豊後國下城遺跡發掘に就いて

賀川 光 夫

下城遺跡は佐伯市の西南約三軒の九州山脈東南脚部に接
續する洪積性ローム層の臺地上にあるもので、從來あまり
知られて居なかつたところである。今年五月十四日大分縣

史跡名勝天然記念物調査委員會に於て、その一部の發掘が決定された。九州考古學會の鏡山猛氏と大分縣史跡調査委員とを以て調査團を組織し六月三日より七日迄五日間の豫定で、この發掘に従事したのである。

この下城遺跡には約四ツの貝塚と彌生式土器の散布地があり、その中のローム層南端にあるA貝塚を中心に四ツのトレンチと南端のB貝塚を中心として三ツのトレンチを計畫した。發掘の主なる目的は從來東九州地に其の例のない石器時代の居住跡を發見することであつた。次に發掘の概要を記すると、第一日はA貝塚から西に向つて長十二米と巾二米のトレンチを發掘した結果トレンチの中央部地表面から一尺五寸の所に平地居住跡の柱穴を發見、この柱穴を中心としてトレンチを擴張し、その結果完全なる方形の居住跡と押型文を發見した。第二日目にはB貝塚を中心とした豫定トレンチを發掘、その中央より焼かれた、平石類の附近に彌生式土器(厚形)多數とフイゴを發見、綿密なる調査の結果鐵滓鐵片類の出土を見たのである。この平石類の配地の状況より推察するに當時の製鐵趾の中心をなすものであることは確實であり、日本最初の製鐵場の發見に發掘團は日没後も遺跡に於て調査を行つた。第三日目はA貝塚附近に押型文の散布層を發見、同時に貝塚下より藁の炭化層を見出し農耕文化のあとを探ることに成功したのである。第四日目は製鐵場附近に於て鐵滓數個と押型文及

び製鐵場を中心として略々楕圓形の居住跡の柱穴を發見した。第五日目には製鐵場を中心にトレンチを擴張彫しい鐵滓類と釘・鐵器等を發見したのである。

以上が下城遺跡發掘の概要であるが、當發掘に参加した鏡山氏は「下城は考古學の寶庫」であると驚歎されたほどであり、今後の調査に對する期待は極めて大きいのがである。特に製鐵遺跡の發見は、製鐵技術がすでに彌生式中期の時代に本邦に傳來して居たことを示すものであり、考古學會に大きな資料を提供したことになるのみでなく、考古學の實證性が歴史の表面の問題として取り上げられたことになるので、下城遺跡發掘の意義は大きい。

ジャクソニヤン・デモクラシー抬頭の意義

櫻井東樹

ジャクソニヤン・デモクラシーは通常一八二九年から一八三七年の間、新たに參政權をえた群衆を率ゐる移民氣な首領により影響を及ぼされた急激な變化に基因すると考へられてゐる。他方、ジャクソン自身は新デモクラシーの精神の創造者であるより寧ろその産物である。新デモクラシーはジャクソンが生きていた特徴と性格を運動の政治面に印綬づけた程度に於てのみジャクソニヤンであると極言してゐる。そこで先づジャクソン登場の經濟的社會的環

境を觀察しよう。第一に、急速な西部の發展であり、この地域を特徴づけたものは自由、平等の精神であつた。然し乍ら二十年代に於いてこの新たな西部諸州は東部の支配下に經濟的的政治的の制度によりその發展を阻止されてゐる事實を見逃せないのである。ケンタッキーの救済戰爭 (Relief War) を始め財政上の危機が爆發の連續を惹起した。第二に、北部及中部諸州に於ける industrialism の勃興であり、賃銀労働者の最初の覺醒が二十年代に起り一八二四から二五年の物價騰貴は攻勢的組織活動を企てるまでに激し、一八二八年にはフライデルフイアに Trade Association と呼ばれた労働組合は最初の労働者の政黨をつくつた。若しこの労働者の投票が南西部及び西部の投票に加はらなかつたならばジャクソンは大統領に選ばれなかつた。第三に、從來著眼されなかつた南部の要因を見出す。農園主達は智識的手段に訴へたが北部に於ける怒號や暴動より以上に合衆國をおびやかした。保護關稅による棉花の低下はヴァージニヤをして嚴格に解釋、カルフオンの無効宣言の原理、南カロライナの州權論を展開させた。以上觀察せる如く西部の農民、東部の工場労働者及び南部の農園主達は彼等が過度に阻害されてゐる事實を見出した時、かの謂ゆる「アメリカ體制」の事業に對する深い疑惑と不信は爆發したのである。シュレジンガーが「アメリカ政治に於ける西部の影響の顯著な例證である」とみられてきたジャクソンニヤン・ド

モクラシーは、ある人々が考ふる程に適切な例でない。その支配的な信念と動因は西部よりも寧ろ東部及南部からであつた」と主張するのは事實を洞察した言であると思ふ。(註) 次にジャクソンの業績を眺めるならば、その治世に於いては屢々失敗を重ね又事實多端であつたが、その内最大にしてジャクソンの性格を加實にあらはしてゐる銀行に對する攻撃について述べよう。一八一六年に二十年間の特許狀を與へられて設立された第二合衆國銀行は西の農夫と東の労働者にとつて獨占的權力の砦となつてゐた。ジャクソンは國立銀行が經濟的必要よりも政治的壓迫に利用せられること多く、それは危険な獨占なりと駭撃し、國立銀行の特許狀更新の法案を拒否してその機能を停止せしめたのみならず、政府國庫の資金を全國の諸銀行へ配分預金すべしと命じた。然るにこの「預金の移轉」により設立された多くの "Pet Bank"、謂はゆる「お得意銀行」は紙幣を亂發したが土地の投機熱と棉花の騰貴に酔つてゐた。一八三六年ジャクソンは俄かに代金支拂は一切正金を以てすべしと命じ遂に一八三七年の恐慌を準備したのである。然し乍ら普通いはれる如くジャクソンニヤン・ドモクラシーはフロントイヤの爆發であり大企業に反對する田舎じみた偏見ある人々を政治に引き入れたなどといふのは事實を説明してゐない。ジャクソンは非經濟的、非 democratic な銀行獨占の代りに、支拂と預入の機能の爲に自由銀行を唱導した。

而もその基本觀念は商業金融資本の權力の性格を最もよく知つてをり、最も烈しく反對した東部から出てゐるのである。實にジャクソンは東部、西部及南部の非資本家主義者の集團即農民、労働者の爲に、資本主義者の集團即東部の金融家の權力を征服することに在つたのである。

(註) Arthur M. Schlesinger, Jr.: *The Age of Jackson*, (1946) P. 1-2

封建制度の起源問題

松垣 裕

アメリカの中世史學者 Carl Stephenson の論文 “The Origin and Significance of Feudalism” (*American Historical Review*, 1941, July) に關する紹介。

論者は先づモンテスキュー「法の精神」に於ける封建制

起源論よりヴァイツ・ロート・ブルンナーに至る古典的學說の完成を略述するが、その主な論点となれるものは、封建制構成要素としての *Vassalität* (従者制) と *Beneficialwesen* (恩給制) の歴史の起源問題、及びその結合關係を追求することにあつた。これを古典的學說の完成者ロートに據つて窺ふならば、次のやうに結論される。即ち全的な意味に於ける封建制の成立は *Vassalität* と *Beneficialwesen* との結合 (その直接的動因としては八三二年ゴアティエの戦に際し爲された (Charles Martel の教會領收奪とその輩

下従者への分配を舉げる) によるものであり、またそれら二つの構成要素はともども古代ゲルマン社會の *Comitatus* (従者) 制に由来するものであると。

しかし、この問題は今世紀初頭以來、新たな觀點から一例へば實證的方法、社會學的方法、社會經濟史的方法一再び論議せられつゝゐる。(A. Dopsch, G. v. Below, F. Lot, H. Mitteis, H. Krawinkel, J. Calmette, M. Bloch, etc.)

茲に於て論者は主としてロー・ドブシュ説に依據しつゝ、先づ封建制度の本質的意味について規定を加へる。即ち廣義の封建制理論 (社會的政治的骨組を構成する封建的諸原理) を追求するに當り、社會學的方法に従つて高次の概念に止揚された理想型を對象とせず、むしろかゝる方法の缺陷を指摘しつゝ、起源的封建制發生の歴史的母亲であるフランク王國社會の特質を分析せんと試みる。論者の結論に

よれば、起源的封建制度の本質は従者制であり、采地 (*field*) は従者制の屬性であると考へられ (實はロー説)、また従者の身分は「光榮を擔へるもの」として、即ち戰士として規定せられる。この點こそ封建制理解の鍵であると説く論者は、次に従來の學說の主論點となつた従者制の歴史起源を追究する。その結果、古典的學說の二つの學派、即ち *Comitatus* (フランク) — *Anstrustiones* (メロヴィンガ) — *Vassalage* (カロリング) の系列を主張するゲルマン學派、及び *Patricinium* (ロー) — *Anstrustiones* (メロヴィン

ンツガ) — Vassalage (カローンツガ) のローマン學派の兩者が、從者制の沿革を單に法制史的必然に於て把握しようとした態度を批判し、就中それら學說の基幹をなす Anglo-Saxons - Vassalage の類似を反駁する。(タキトウスのゲルマニア批判、Vassus の語源吟味、シャルルマーニエの Capitulare Missorum 文書批判による)。論者の提起する問題は、メロヴィンガ時代社會が果して完全にゲルマンの遺制のみを留めるものであつたか否かといふことであり、Scholares — Vassalage の系譜を主張する Gullin-cmoz 説を背景としつゝ、該社會がむしろ僞ローマ的社會(ローマの要素を含みつつゲルマンの慣習に支配せられる)であつたことを論證することにより Vassalage の前驅的存在は Leudes (ノ戦士の從者) といふ特殊な意味に於ける王の "people" — A. Dopsch) であると考へる。(この主張はモンテスキューに於て既に採り上げられ、近年ドブシニにより實證的に裏付けを得た。)

以上が所論の骨子であるが、方法論的にみて最も強調される點は、起源的封建制の特質を、それが發生せる歴史的社會的條件の分析を通して理解しようとする企圖であつた。しかし我々は、かゝる論者の意向にも拘らず、その方法が依然法制史的理論に依存してゐることに注目する。即ち封建制の本質を從者制といふ身分關係に於てのみ把握しようとする態度がそれである。問題はむしろもう一度封建

制の本質に就き基本的な概念規定を再吟味することにあるのではないか。

論者によつて單に從者制の屬性と考へられた采地がその獨自の生産關係を通じ封建制社會構成に果した積極的役割について全然觸れるところが無いのは、このことを裏書する。

また僞ローマ的社會とは具體的にどのやうな構成をもつものであつたか。この點を説明せずしては、それ自體の社會的性格を反映するとされる Leudes の特質も自ら曖昧であり、況してその兩者を單に「社會的歴史的關係」といふ便宜な概念によつて結合させることは、餘りにも早計であらう。茲でも論者自身非難した類型的方法の轍を踏んでゐる。

實證的、史料操作の技術的面についての検討は爲しえなかつたが、新しい研究に接する機會に乏しい我々にとつては最近の實證的歴史學派の成果を一應網羅してゐる點で注目されてよい。

昭和二十三年度九州史學大會

本年度大會は九州史學會創立二十周年を記念して、十一月十三、十四兩日に亘り三長閑に於いて行はれた。熊本、大分、宮崎、鹿兒島、長崎各縣よりの新舊諸會員の來集も多く、史學會はじまつて以來の盛會であつた。

第一日は十三日(土)午後一時より講演會が行はれた。

一、歴史の主體について

九州大學助教授 瀧澤 克己

一、宋錢の輸入とその流通

九州大學教授 森 克己

第二日は十四日(日)午前九時より夕刻に及ぶまで、左記の研究發表會を行つた。

1、ジャクソニア・デモクラシイ考 櫻井東樹

2、獨立戰爭の經濟的原因 福本保信

3、社會改革としての南北戰爭 森 祐三

4、ウイリカツイオンの解體について 三池眞幸

5、ブルクハルトとランケ 讚井鐵男

6、スタール夫人「亡命十年」 益田健次

7、ホツプスの自然法思想 田中 稔

8、極東國際關係史上に於ける鄭氏の地位について 江口 量

9、唐の班田について 河原芳郎

10、魏書燭々傳に見える俵力發^{セリハツ}について 平島 貴義

11、萬葉と對馬 疋田 通文

12、近世初期農民の性格

——天正十七年肥後國檢地帳を中心として——

安藤 精一

13、二三の古傳説及び古文獻に現はれた憑依現象について 王丸 勇

14、中津藩の城下外店成立 菅沼 好一

15、柳河藩の性格と檢見法 西岡 正之

16、福岡藩に於ける享保の大飢饉と捨子問題 加藤 義雄

17、福岡藩の上ケ米について 近藤 典二

18、中原村記録について 繪垣 元吉

〔講演〕

歴史の主體について

瀧澤 克己

緒論 「歴史の主體」という言葉について——歴史すなわ

ち人生——主、主觀、主體——「主體性」ということが

今日問題とされる理由——現代の不安、倦怠、焦燥——

問題解決の二つの方向としての史的唯物論と實存主義

一、兩派の主張の要約

A、史的唯物論者の見解——互に深く關聯してはいるが

しかし嚴密に區別されるべき二つのモメント ①經濟

的・社會的環境の重視 ②科學的認識と政治的實踐の

強調——實存主義に對する批判

B、實存主義者の見解——互いに深く關聯してはいるが

厳密に區別されるべき二つのモメント ①人間の自己
そのものの問題に對する鋭敏な感受性 ②この問題の
客觀的・對象的（廣義において科學的）な處理の可能
性に對する否定

二、兩派の主張の再吟味

A 實存主義者の迷妄——①人間の自己そのものの發生
の基盤（根本的決定性）に對する盲目、そこから來
る絶望（「悲しきおももち」） ②自己そのものの對
象的把握（ないしは廣義における技術的處理）の可能
性

B 史的唯物論者の不徹底——①人間が事實そこに生き
てゐる場所の根本的規定に對する盲目（そのいわゆる
物質環境概念になお殘る曖昧と抽象性）、そこから
來るいつはりの樂天性 ②その科學的認識に忍びこむ
形而上學的思辨——その政治的實踐に潛入する宗教的
非合理性

三、新しい道

A 轉向ないし妥協（いわゆる「絶對媒介」）の無意味
——それぞれの方向の徹底（自己超克）による兩派の
對立の克服——絶對の外としての自己そのものの問題
と、眞實の内としての經濟・社會の問題——敵はむし
ろ自分の側にある（直實の自然そのものからの警告と
しての反對派）

B、歴史の主體について——絶對の審きの庭すなわち惠
みの園としての現實の歴史的世界——絶對の内なる絶
對の外としての神（歴史の主）——神の園の管理を委
ねられた者としての人間の自由（主體性）——現代に
おけるプロレタリア階級の主體性（以上）

二十周年記念出張講演

九州史學會創立二十周年記念講演會を左記の如く行つ
た。五月初旬大分縣佐伯市にて開催、講演者及び講演題目は
次の如し。「歴史と農耕生活」日野教授、「理想社會の諸問題」
小林教授、「九州の古代文化について」檜垣講師。ついで六
月二八・二九兩日鹿兒島市に於て、三〇日鹿屋市に於て次
の講演を行つた。第一日「穀稻粟と米」日野教授、「古代
國際貿易について」森教授、「歷史上における天才の問題」
小林教授、第二日は「理想社會の諸問題」小林教授、「歴
史學と史料について」森教授、「中國史の研究と文學」日
野教授、第三日は「支那における貨幣の發達」日野教授、
「理想社會の諸問題」小林教授、「获生徂徠」西尾講師。い
づれも盛會であつたが、特に鹿兒島においては入會の希望
者頗る多く新會員を多數加へた。

史學懇話會

昨年發會したこの會は、學内會員の研究發表を活潑なら

しめ、現代の史學界に於ける諸問題を批判檢討し、併せて會員相互の親睦を計るためといふ最初の趣旨に則り今二十三年に入つても逐次行はれた。次にその概略を簡単に報告する。

第七回（一月二十九日）

昭和二十二年十二月四日東大新聞所載の遠山茂樹氏の批判「ヒューマンイズムを見失つた歴史家—津田博士の方法論的限界—」を中心として討論會を行つた。先づ津田氏の立場を國史料加藤君が、次に遠山氏の立場を國史料井上研究生がそれぞれ述べ、その後會員一般が種々討論を重ねた。參會者十九名。

第八回（二月六日）

臨時講義のため來學中の姫路高校教授内田吟風先生歡迎をかね、先生より「匈奴とフン—その人種的特徴の差異—」といふ題下に極めて有益なる御講演を伺つた。なほ講演の要項は後記の如くである。參會者十七名。

第九回（四月二十三日）

「九州繩文式土器論年史」と題して國史料渡邊研究生が研究發表を行つた。參會者二十一名。

第十回（五月二日）

高良山遠足會を行つた。七時十分西鐵福岡驛集合。七時三十分出發。バスにて高良山下御井町に九時到着。九州考古學會と合流して鏡山先生の御説明を聞きつゝ、神籠石等を

見學しながら頂上の神社に到着。晝食後神社の寶物を拜觀した。繪縁起二幅、應安四年覺一本平家物語、漢式鏡、和鏡等であつた。拜觀後九州考古學會の座談會に入り、先づ肥後の小林久雄氏の肥後古墳のお話あり、次で鏡山先生の神籠石についてのお話があつた。午後三時頃終會となり、折から降りだした晩春初夏の山雨の中を三々五々歸路にいつた。參會者十一名。

國史料の動向

〔森教授學位論文「日宋貿易の研究」の發行〕

森克己教授は學位論文「日宋貿易の研究」を昭和二十三年五月國立書院より發行された。その内容は

序説

第一編 日宋貿易の端緒的形態

第二編 我が受動的貿易の展開

第三編 我が能動的貿易の展開

第四編 貿易の展開と關稅的性質の發生

第五編 自由貿易より統制貿易への復歸

附録 日、宋、麗、交通貿易年表

の五編 五百七十四頁より成る。

史學雜誌第五十六編第九號の學位論文審査報告の一部分を引用すれば「抑も日宋貿易に就きては從來二三の研究者と雖も或は平面的考察を事とし、敘述も單に概說的なる

憾あり、或はその研究斷片的にして未だ本格的ならざる嫌を免れず、然るに本論文は研究の態度極めて質實にして依據は正確考察は綿密殊に幾多の新史料を發見して事實の闡明に貢献せり。例へば宋代公憑の實例の發見の如し」とある如く多くの新事實を發表せられ國史學界に貢献するところ大なるものがある。

〔竹内理三教授の新任〕

昭和二十三年九月一日付を以て竹内理三教授が國史學第二講座を擔當される事になり、先に森教授を迎へた史學科の陣容は更に充實されその活躍が期待されてゐる。

竹内教授は第八高等學校を経て昭和五年東大國史科を御卒業、直ちに史料編纂所に入られ編纂官、記録部部长、東大國史科講師を歴任された。

主なる著書は

「奈良朝時代に於ける寺院經濟の研究」

「日本上代寺院經濟史の研究」

「奈良朝史」

雄山閣新講大日本史講座「飛鳥時代史、奈良時代史」(奈良時代史を擔當)

「寺領莊園の研究」

「寧樂遺文」(上下)

「平安遺文」(卷一、卷二以下續卷)

其の他論文多數がある。

〔研究生の新任〕

大學院特別研究生第一期生として

昭和二十二年十月一日

「近世史上に於ける農村の研究」

昭和二十三年四月一日

「近世九州地方林制史」

第二期生として

昭和二十三年十月一日

「言語表現の變遷より見たる日本人の思想及び感情の展開」

の三人が許可された。

國史研究會

昭和二十三年五月十七日午後三時より第五演習室にて討論會を行ふ。

「過去の生活をどう理解するか」

(思想一九四八年一號 つださうきち)

擔當者 鈴木銳彦君

昭和二十三年九月三十日、午後二時より第五演習室で研究發表並に座談會を行つた。

「近世初期福岡藩に於ける貨幣經濟發達の一考察」

加藤義雄君

同年十月七日、午後二時より第五演習室にて

「中津藩に於ける城下三里制」 菅沼好一君

西洋史學科の動向

小林教授は主任教官として講義演習を擔當せられる傍ら、鋭意「天才論」の研究に精根を注がれ、本年度に於ては『ヒューマニストの古ゲルマン研究について』(史淵前輯)、『十八世紀フランスにおける天才論の性格——市民層との關係を中心として』(西洋史學第三輯)の二論文を發表された。また我々學生に對して終始懇切に指導されるとともに、社會經濟史的關心にも極めて深い御理解あり、將來に於ける同教授の輝かしい學問的功績と併せて我々の期待は益々大きいのである。

研究室では四月二名の新入學生を迎へ、侵略戰爭前後の沈滞から一舉に脱却、新しい知性の鏡磨に發刺たる研鑽が續けられてゐる。我々の當面する緊急の課題は、著しく立ち遅れてゐる歴史學の科學的水準を高め、こゝから期待し得る歴史的認識に基くところの社會進歩を擁護することを措いてないであらう。そして中央に較べ學問的環境に恵まれない我々が、派閥的地方性から脱出する唯一の道もまたこゝにあることを知らねばならぬ。我々の課題は、もとより擔ひえぬ程に重い。しかしこの眞摯な試みは、社會的推進力の一要素として、必ずしも消極的ならざる意味をもつといへよう。

五月初旬、新入學生歡迎會を兼ねて懇談會を開く。劈頭小林教授より學問的態度一般につき御教示あり、次いで當面の諸問題に就いて意見の交換討論が行はれ、盛會裡に散會した。

研究室では、前年來定期的に開かれてゐる西洋史學研究會を今年度も繼續することとし、その第一回を四月十五日開催、爾後別記の如く研究發表を行つた。以下研究會に於ける題目、及び發表者自身による要項記録を掲げる。

西洋史學研究會 第一回(四月十五日)

Sailer Mathews; Social Patterns and the Idea of the God. (に就く)

櫻井 東樹

(序説)

神に對する人間の信仰は人間の道徳性を意味し、それは人間の社會生活に必然的關係があることを機械論的な觀方と比較して、人間の社會的存在が宗教的態度を本性とするところに特色をもつと述べる。

(第一章)人間の生活態度には(一)非人格的關係及び(二)宇宙との人格的關係がある。後者は社會經驗から引き出される故、宗教的態度は社會生活の型(patterns)を豫想する。そこで社會に於いて人格關係をつくる方法は、超人的要素と同じ關係を建てる目的のために型として利用される。

(第二章)併し乍ら宗教的態度は集團實踐の問題だけではない。勿論集團は mind-set をもつてゐるが、社會秩序

の變化とともに集團の心理構造が變へられる。宗教に於ても同じく宇宙的要素への調節を得るために生命的衝動の合理化が行はれる。この型作成の過程が神の理念の生成を條件づけてゐる。従つてこの型の連續を辿ることが人類の仕事であり、こゝに歴史的敘述の必要が生ずる。

(第三章)とこゝで社會生活の複雑化は、象徴的行動を産み出す。例へばキリスト教の「聖餐」。しかし社會秩序が變化すれば宗教的態度と宗教的實踐は自ら分解し、嘗て集團思想の型と同一視されてゐた宗教の型はもはや一致しえなくなる。

(第四章)然し乍ら確定的な事實として次の二つのことは注意されなければならぬ。即ち(一)宗教的實踐と思想の型は、社會秩序の改變により必ずしも放棄されないこと(二)社會秩序の變化それ自體の中に宗教的繼承を含むことである。かゝる過程を歴史的に研究すればする程神の理念を理解する唯一の道は一集團の發展を研究することであることが分る。各文化の相互作用は勿論認めなければならぬが、寧ろ我々は各文化の社會的起源と變化しつゝある型を辿つて分散的に神の理念を研究しなければならぬ。

(結論)儒教、印度教、佛教に較べて、キリスト教に於ける神の理念の生長は、高度に發展した社會秩序に於ける宗教的態度から結果せる型の歴史を持つてゐる。

第二回(五月二十七日)

彙報

Ernst James: The Political History of Roger Williams に就いて 福本 保信

ロジャー・ウィリアムズの國家觀。清教徒的國家觀と異り、彼は明確に市民國家と精神國家とを區別した。即ち彼によれば、前者は人々の集團と利益のために權力を有し、後者は精神生活及び宗教的良心に權力を限られる。

それら兩者の權威は人間の二面をそれぞれ獨自に統御するものではあるが、しかし國家なるものは決して宗教ではないことに注意しなければならぬ。何故ならば市民國家では力・權力・權威は宗教的なものでなく、自然的・人間的・市民的なものであるから。然しこの兩者は相互に排斥し合ふものではなく共存的である。そしてそれぞれ獨自の領域に於て國家の平和と繁榮を助長するものである。

第三回(六月十日)

獨逸農民戰爭に就いて

三池 眞幸

この論題を取上げる際、農民戰爭一般を對象とすることは無意味である。如何に、如何なる點に於て農民戰爭とありあがるか。その一つの方法として、私は Landesherrschafft、即ち Gerichtsherrschaft (領主裁判制)と農民戰爭との關係を特に論じたかった。獨逸近代國家の起源をなす Landesherrschafft は農民戰爭の結果如何なる影響を受けたか。根本史料に即して研究するのは今後の私の課題として残されてゐるのであるが、こゝではただ研究方法に關する一つ

の問題提起を試みたに過ぎない。

第四回（七月七日）

近世紀西ヨーロッパに於ける「農業の變革」

——その技術的側面——について

吉野健次郎

主として J. Knipscher の所論を中心として、十六世紀以來の西歐に於ける農業の變革に就き概觀、それが特に獨佛に於て立遅れるとともに、英蘭では早くから著しい變革過程を示すに至つた阻止的或は促進的な二つの條件——社會的、歴史的條件を分析する。

昭和二十三年三月卒業論文題目

國史科

宇佐使考

徳川幕府の木材統制策

中世武士社會に關する心的一考察

西洋史科

アングロサクソン民族のブリタニヤ移住とケルト

民族

昭和二十三年度史學關係講義題目

前學期

國史

日唐交通史

演習園太曆講讀

演習平安朝史料講讀

日本思想史

近世思想史

演習花傳書

東洋史

東洋史概説

耕牛問題と宋代の農民生活

演習宋史食貨史

西洋史

西洋史概説

演習 Webster. Historical Selections

同 M. Weber. Wirtschaftsgeschichte

其他

現代哲學史

西洋哲學史

演習中國哲學史（莊子外雜篇）

中國哲學史（儒教倫理特ニ大學中庸ニ於ケル）

同

社會構造論

教育史概説

日本繪畫史

森教授

同

檜垣講師

同

西尾講師

同

同

日野教授

同

同

小林教授

同

同

同

同

瀧澤助教授

同

矢崎教授

同

同

山室講師

同

秋葉講師

同

平塚教授

同

谷口講師

西洋美術史

印度哲學史 (二部)

國語史

英文學史

日本法制史 (講義並ニ演習)

日本政治史

日本經濟思想史

日本經濟史

西洋經濟史

ロシア政治史概説

矢崎 教授

千潟 教授

福田助 教授

中山 教授

金田 教授

今中 教授

宮本 教授

同

石濱 教授

竹原 講師

九州史學會本年度委員

顧問

長壽吉

重松俊章

森克己

小林榮三郎

同

檜垣元吉

委員 渡邊正氣

同 福本保信

同 伊藤安展

同 日野開三郎

同 西尾陽太郎

委員 井上忠

委員長
集會幹事

常任委員

編輯幹事

叢報

書記

委員 安藤精一
同 鈴木銳彦
同 松永雅生
牧久

お願い

罹災疎開等により會員の住所不明のため史淵の返
送されるものが相當多數あります。御自身及知友の
新住所をお知らせ下さい。